

県中教研 保健部会だより

第 34 号

発行日 平成31年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 近藤 雅子
題 字 金山 泰仁 先生

健康教育の実現に向けて

指導主事 團 千加子

今年度の中学校教育課程研究大会では、射水市中教研保健部会から市内養護教諭の連携した取組が紹介されました。多くの学校で一人配置の養護教諭が、組織力によって生徒の実態・課題把握及び分析や授業で使用する資料作成等で協力し合い、生徒の課題意識や実践意欲を高めることにつながったことを実証する発表でした。特に、生徒の健康課題を把握するために行った教職員アンケートは、学校全体で健康教育に取り組む上でも有効な手立てになっており参考にしたいところです。

授業力向上のためのアドバイザーとして、東海大学教授森良一先生が講師として招かれ、お話を聴く機会に恵まれました。冒頭で、「時間割に『健康』という教科・領域がない、健康教育の必要性は教育基本法第1条、第2条に根拠があり、現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の1番は『健康・安全・食に関する力』である」と話されたことが、今でもとても印象深く心に残っています。前教科調査官であり新学習指導要領の作成の中心であった森先生のお話から、改めて学校の教育活動全体で健康教育を実現していくことの必要性を確認できました。

新学習指導要領では、小学校体育科で学習した生活習慣病を中学校、高等学校でも学習するなど、教科の学習内容は体系化されており、発達段階に応じて学びを深めていくこととなります。人生100年時代を生きる生徒たちが、生涯にわたって自らの健康に向き合い豊かな生活を実現していくことが期待されています。自分の健康と向き合うことが、自分を大切に生きていくことや、自尊感情を高めることにつながればと願うばかりです。これからも、中教研保健部会の組織的な取組が生かされ、各校において健康教育が着実に実現されていくことを心から祈念申し上げます。

(東部教育事務所)

横と縦のつながりを大切に

部長 近藤 雅子

今年度の中学校教育課程研究大会の発表は、生徒の健康課題解決に向け、R-PDCAサイクルを意識して地区の養護教諭が連携して学級活動の指導案を作成し、教職員と共に取り組んだ実践でした。私は発表地区の部員として関わりました。

実践のきっかけは、生徒が「なるほど、なんとかしたい」と思う学級活動にするには、どのような指導をしたらよいかという部員の相談を受け、部会で検討したことです。部会ではそれまで個別指導に取り組んでいましたが、個別指導だけでは健康課題の解決が難しい生徒に対応するために、学級活動を中心に推進していくことにしました。

当初は、部会で検討した指導案を活用して一部の学校で実践していましたが、継続するにつれて実践の輪が少しずつ市内に広がりました。学級活動を実践した担任からの「きめ細かな準備があり生徒が理解しやすい」といった温かい声に背中を押され、一緒に取り組む教職員から多くのことを学び、支えられて今日に至っています。

部会で協議を重ねて作成した指導案や指導資料は、授業だけでなく、掲示資料や委員会活動等の様々な場面でいつでも活用できる部員の宝物になっています。悩みを共有し、苦労を共にできる仲間同士の横のつながりは、お互いの心の支えでありかけがえのないものです。

今後、ますます複雑化する生徒の健康課題に対応するために、私たちは健康課題を的確に把握し優先度を判断した上で、専門性を生かした取組を計画的、組織的に推進していくことが求められています。

部員同士の横のつながりと、チーム学校の一員としての縦のつながりをこれからも大切にして、実践と研鑽を重ね、生徒の生涯にわたる健康づくりのために、一緒に取り組んでいきましょう。

(射・新湊南部中)

第62回 研究大会報告

10月16日富山市速星公民館で研究大会が開催され、全地区から会員85名が参加した。研究主題「生涯にわたって主体的に心身の健康づくりに取り組み、健康で安全な生活を営む能力や実践的な態度を育てる健康教育はどのようにすればよいか」の下、夏野由美子養護教諭（小杉中）と堀田由果里養護教諭（射北中）から提案発表があった。

○ 発表内容と部会協議

射水市中教研保健部会では、様々な健康課題を抱える生徒に対応するため、保健室での個別指導と併せ、平成17年度から学級活動の推進について研究を進めている。

まず、R-PDCAサイクルによる組織的な取組が紹介された。健康づくりノートや保健室来室生徒の実態に加え、教職員アンケートの結果を基に、養護教諭が連携して市の健康課題を把握・分析し、課題に沿った題材を設定する。保健部会で指導案や資料を作成し、各校の校務運営委員会や学年会等で共通理解を図り、学級指導を行う。指導案や資料を市のネットワークで共有し、市全体で共通した指導内容を、各校の実態に応じて実践できる体制が整えられていることが発表された。

また、実践意欲を高めた事例として、「自分の生活を振り返り、課題を意識させる工夫」「課題解決への意欲を高める教材や資料の工夫」「生徒同士が関わり合い、実践意欲を高める場の工夫」について、生徒の反応や授業者の振り返りを含め、具体的に紹介された。

部会協議では、各自が事前に記入した協議シートを基に6人でグループ協議を行った。

視点1「健康教育を実践につなげる工夫」では、生徒の健康実態やニーズに合った指導を市内一斉に展開できる組織的な取組について活発に意見が交わされた。



視点2「生徒の実践意欲を高める指導の工夫」では、理解が深まる資料や生徒同士が関わり合う場の設定が、生徒の実践意欲を高めるのに有効な手立てであることが話し合われた。

○ 指導講話

團千加子指導主事（東部教育事務所）からは、以下の指導助言をいただいた。

研究主題の「生涯にわたって」「主体的に」のキーワードを達成するため、養護教諭には、専門性を生かした役割を果たすことが期待されている。

射水市の実践では、R-PDCAのRに重点を置き、実態把握の段階から市内養護教諭が協力し、他の教職員の意見を加え、分析・協議を行った結果、生徒の実態と教職員のニーズに合った学級活動を実現させていた。さらに、組織的に教職員に働きかけたことで、各校の実践へと循環していった。14年間にわたって実践を積み重ねてきたことが、取組の原動力になっている。

組織的な取組の継続は、教職員の意識を高め、授業に様々な工夫を生むこととなった。学級担任が、生徒の健康を気に掛け科学的根拠に基づいて行う授業は効果的である。そこに養護教諭が加わると、説得力が生まれる。生徒会等の取組と連携した授業を展開すれば、生徒の実践や改善への意欲をさらに高めることが期待される。

健康教育は、生徒がいかに自分のこととして考え、実践できるよう支援するかが大切である。授業をきっかけにして、授業のガイダンス機能とともに、保健室のカウンセリング機能を生かした個別指導につなげ、継続的に支援していくことが大切である。

保健部会の取組が市内の教職員の輪に広がっており、射水市の生徒は射水市の先生に守られていると実感した。今後も、3年間の中学校生活を通して、生徒が、生涯にわたって主体的に自分の体や健康と向き合い、健康づくりに取り組む態度や能力が育成されることを期待したい。

前田 千帆（高・福岡中）

新学習指導要領を踏まえた健康教育の推進

講師 東海大学体育学部体育学科 教授 森 良一 先生

1 新学習指導要領について

学校保健は、学習指導要領に基づく「保健教育」と、学校保健安全法に基づく「保健管理」を一体として考える。

中教審答申では、これからの予測困難な時代に、現代的な諸課題に対応できる資質・能力として7項目が明記されており、その1番目に「健康・安全・食に関する力」が挙げられていることが重要である。

近年は、適切な性行動や薬物乱用防止の徹底等が課題とされ、必要な情報を自ら収集し、適切な意思決定や行動選択を行うことができる力を育むことが求められている。そのために、学校保健計画を作成し、各教科間や家庭等との連携を図ることが重要である。

また、集団のガイダンスと個別のカウンセリングを連動させる視点が必要である。教育における個別指導は、医療で行われる保健指導と異なり、発達段階や特性等に応じて行う。今後、個別でないと対応できない課題が増加すると考えられるため、個別指導の充実が重要である。

学習プロセスでは、「深い学び」が最も重要である。単にグループ活動をすればよいのではなく、考えが深まっているかどうか重要である。保健指導も他の教科と同様、対話があり、自分の考えを言える場があり、終末で自分の考えが「深まった」と思える指導を目指してほしい。

2 健康教育の一環としてのがん教育

国は、がん教育を今後さらに展開していくことを目指す。新学習指導要領では、「エイズ」以来、病名「がん」が単独で示された。がん教育の目標は、「がんについて正しく理解することができるようにする」、「健康と命の大切さについて主体的に考えることができるようにする」ことである。このため、がん教育は保健体育科だけでなく、特別活動や特別の教科 道徳等を相互に関連付けて実施

する。外部講師の活用や地域関係機関との連携等、多様な指導方法を工夫し、中学校・高等学校においては、より積極的に取り組む。

医学は進歩しているが、がんの死亡率が増加しているのは、高齢化に要因がある。「自分たち中学生には関係ない」と生徒に思わせないようにする工夫が必要である。

単に、病気を治すだけでなく「生活の質」を大切に考える考えが広まっている。また、がん患者への理解と共生を、生徒に働きかけていくことが大切である。

3 健康教育を進める上でのポイント

特別活動では、授業展開「つかむ→さぐる→見付ける→決める→実行する」の流れの中で、自己決定で終わらずに、実際の行動につながっているかを振り返る機会を必ず設け、学んだことを将来につなげることが重要である。これが、保健体育科と特別活動の違いである。また、中学生の時期は、他律から自律への過渡期であるため、小学校と中学校で同じ指導をすることは効果的ではない。

さらに、全体をよりよくしていくには、個別指導が必要である。中でも、大きな問題を起こす可能性のある生徒たちへの支援、ハイリスク・アプローチが欠かせない。養護教諭はハイリスクの生徒に一番近いところにいる。一人一人の発達の特性に応じた指導を充実させ、改善していくことで、全体の健康レベルを高めてほしい。



石崎いずみ (小・蟹谷中)

富山市保健部会の取組

富山市保健部会では、部員が生活習慣・運動器・がんに関する指導の3つのグループに分かれ、3年計画で研修を進めています。グループ毎に実態を把握し、指導内容や資料・教材についての検討を進めてきました。今年度は、各学校の実態に応じた実践を通して研修を深めました。

<生活習慣に関する指導グループ>

養護教諭を中心に教員と企画し、外部講師と連携して歯や熱中症に関する指導を特別活動や学校保健委員会において実施することで、生徒の健康な生活習慣の定着につなげることができました。



<運動器に関する指導グループ>

全校生徒参加型の学校保健委員会で、整形外科医やスポーツトレーナー等の専門家の話を聴いたり、運動部を対象としたトレーニング講習会等を行ったりしたことで、けがやスポーツ障害の予防について、生徒の意識が高まりました。

<がんに関する指導グループ>

3年の保健体育科保健分野で、保健体育科教員と共に、「がんについて正しく理解すること」をねらいとして授業を行いました。さらに、ピアサポーターや認定看護師等の専門家と連携を図り、健康と命の大切さについて主体的に考えられるように授業を行いました。生徒は、健康的な生活習慣に留意すること、がんになっても懸命に生きようとする姿があること、命を大切にすることを学びました。

今年度の実践を通して、教職員や専門家と連携を図り指導を進めることで、生徒の実践意欲の向上につながることが分かりました。今後も、生徒が主体的に健康な生活を実践できるよう、養護教諭がマネジメントするという視点で健康教育を推進していきたいと思います。

井沢 悦子（富・八尾中）

砺波地区保健部会の取組

砺波地区保健部会では、健康教育のマネジメント力向上をねらって研究してきました。

<講義と演習による研修>

今年度は、「養護教諭のマネジメント力向上のために」と題して、西部教育事務所 高岡陽子指導主事と富山大学人間発達科学部附属中学校 大場真紀子養護教諭に、講義をしていただきました。

大場先生からは、「継続的な実践を行うことが周囲の理解や協力につながる」「養護教諭の立場から、エビデンスに基づいてマネジメントすることの大切さを学びました。高岡指導主事からは、「生徒に付けたい力を明確にする」「今あるものをつなぐという考え方で進める」ことがカリキュラムマネジメントで必要なことであると指導していただき、その後、年間指導計画作成の演習を行いました。

<実践事例の紹介>

南砺市立利賀中学校 田村数枝養護教諭による9年間を見通した健康教育の実践事例から、発達段階を踏まえた継続性のある指導や小・中学校教員、家庭や関係機関との連携の在り方、R-PDCAサイクルを活用した効果的な健康教育について学びました。



<グループ協議と情報交換>

R-PDCAサイクルのワークシートを基に、各校の健康教育の工夫や悩みについて意見交換をしました。その結果、どの学校もR-PDCAを意識した活動が行われていましたが、「学校全体に取組を広げるにはどうすればよいか」「家庭との連携はどうしたらよいか」等、共通の悩みがあることが分かりました。

今後も、生徒が主体的に健康な生活を実践できるよう協力して研究を進めていきたいと思います。

石崎いずみ（小・蟹谷中）